

114  
A 5181

あ

大正十一年四月  
大隈侯爵邸寄贈

A 3779  
844

清國在苗ヒツトルマシ氏送致セル日本原茶ヲ  
以テ再製シタル支那緑茶ノ評辨

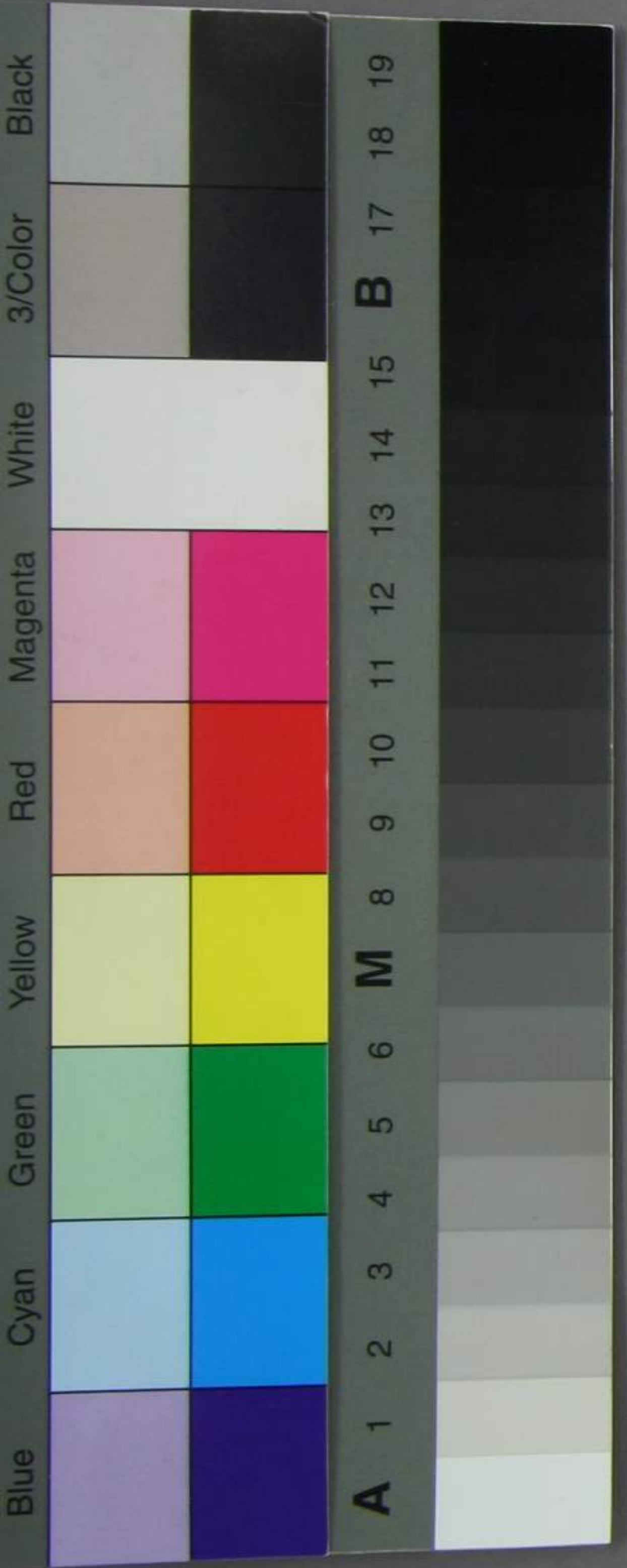
一ノ一 此二種同品ニシテ只節分ツノミ  
一ノ二 上ノ二品中ヨリ撰出シタル屑

此原茶ハ全ク我九州地方ノ日干製ニメ之  
レニ茶品<sup>ペレンス</sup>石膏ヲ加ヘ支那緑茶ニ変製セシモノ  
ナリ

但シ此茶品ハ人ノ健康ヲ害スルト云然レモ此二品ヲ用テ  
着色セサレハ原茶ノ終ニ<sup>ニ</sup>緑<sup>ニ</sup>ニサナルニ仍リ支那人  
常ニ之レヲ用ヒテ製造セリ

右原茶ハ極メテ廉價ニメ支那人之レヲ九州地方ニ  
購求シ自國ニ於テ如斯再製ニ以テ外國ニ販賣  
從來利ヲ得ルハ曾テ衆人ノ知ル所ニテ旧幕府

内務省



中長寄に於て一會社ヲ結立シ支那人ヲ雇入レ  
大ニ其業ヲ起スト云々只費多ク好ム者寡キカ  
故ニ竟ニ因社變業シタリト然シテ當寮ニ於テモ  
煎本縣下人吉ニ製茶場ヲ設ケ支那人兩名  
ヲ雇入昨今兩年間山本ノ生葉ヨリ支那製  
各種數十品ヲ試製シ更ニ茶品之ヲ歐米支那  
等へ見本トシテ進送シ之カ品評且ツ其適スル  
モノハ后采賣買ノ結約ヲ要セシニ未タ各國ニ  
リ委ク答報ナシト虽先ツ其采レルモノヲ左  
載シテ御冬考ニ供ス

支那ニ於テハ

製方美ナリ然レ未タ精ヲ得タリトセス且ツ之ク日本ハ  
從來一種ノ佳製アリ然ルニ更ニ支那ニ模製スハ恐

ラクハ懲リナルヘシト

賣買結約ニ至リテハ敢テ不望其價位ヲ付スルモ各  
自格外ノ異同アリテ確タル實價ニ非ス

米國紐育ニ於テハ

支那茶ハ人躰ヲ害スル藥品ヲ用テ着色シ且濫製多  
ク之カ為大茶商ノ因店スル者有リテ追次不適ニ  
至レリ日本茶ハ更ニ茶品ヲ不用カ故ニ之ヲ無色茶ト  
稱シ漸々好喫スル者増加セリ其好喫スルモノヲ措テ不  
適ナル者ヲ輸送スルハ好マシカラス因テ如是品ハ再々輸入  
ヲ欲セスト

英國噶嶼ニ於テハ

可否ノ說隔ニシテ確タル約定ハナケレモ其不適トスルモノハ  
紅茶ニメ適スルモノハ皆綠茶ナリ租其價位ヲ付スルハ

其ノ原價ハ以内或ハ以外ニ出ツルモ其送費ヲ毎算スレハ  
到底損分ニ属スヘシ

澳國維也納ニ於テハ

支那茶ハ各地ニ行蔓シ曰来其倍ヲ布ケリ然ルニ今送レル  
所ノモノハ凡テ皆不適當ノモノナラス。今日本茶トメ賣弘ナンニ  
ハ頗ル廉價ナラサレハ難シトス然レテ試ミニ左ノ價ナレハ  
引受賣ルヘシ

紅茶ノ分原價百斤ニ付 金三拾四圓強ナリモノ  
即百斤ニ付 金三十四圓強ト

原價ノ十分甚ナリ

其他綠茶ハ指テ問ハス

右ハ昨年人吉試製茶ノ外評ニモ本年製ノ如  
キハ僅カニ近日輸出セシユヘ未タ評論ヲ受ケサルナ  
リ

印度派出多田元吉等ノ公信ニ於テハ

印度ハ近頃綠茶製甚タ稀ナリ其所謂ハ全國ニ於テ喫人  
追次減少シ從テ價額大ニ下落シ且粗製ノ為ニ大ニ色  
價ヲ墜ニシタリ

紅茶製ハ漸次繁殖セリト

本年人吉ニ於テ試製各種ノ内紅茶ノ製方最モ私  
劣タリ試ミニ之レヲ綠茶ト共ニ横濱ニ於テ試賣セシニ  
劣製ナル 紅茶百斤ニ付原價金貳拾五圓強ナリモノ  
百斤ノ賣價平均約拾八弗ニ賣タリ

精製ナル 綠茶ノ分ハ更ニ望ム

前件ニ就テ冬考スレバ綠茶ハ急須ノ紅茶ノ行ハル  
ヲ知ルニ足ルヘシ。現今宇治製ノ輸出スルハ無色  
製ノ為ナリ日干製ノ輸出スルハ。其那綠製ハ。其  
此ニ種ノ輸出多寡ヲ以テ美スレハ宇治製ノ方ニ幾

内務省

十倍ノルハ論ヲ竣タサルヨリ依テハ成ル可ク皆之ヲ  
宇治製ニナシ再製ノ輸出ヲ盛ルニシテ度尤新製ニ力  
ヲ届キ難キ九州地方多量山茶ノ如キハ漸次紅製衣  
ノ道ヲ勸誘シテ専ラ半天日干等ノ粗製行  
造ヲ預防スルヲ目下ノ急務ナラン事  
又一按

論頌ノ品評ニ紅茶ハ凡テ適セス緑茶ハ大概適セリト  
是レニ固テ今新ニ緑茶ノ一商途ヲ開カントスレハ一  
莫損益ヲ不問シテ緑茶ヲ續々英國ニ輸出販賣  
スル時ハ價位相当ニ到ルノ期必ス無シトハ申シ難ク  
尤其製方人吉ニテ試製セモ如ク各種品類ヲ  
分チ生葉ヨリ製スル片ハ恐ラクハ労益相償ハサラン  
歛矢張支那人ノ為ス如ク半天日干原茶ヲ以テ

三四種ノ類別製造セハ数種ノ器具ヲモ要セス  
製手ニ至ル迄大ニ尺費ヲ減少シ多量ヲ製得  
スル甚タ容易ニシテ利アリト虽茲ニ一難アルハ人  
躰ノ健康ヲ害スルトノ説マルニ品ヲ用テ着色  
セスハ決シテ支那製ノ如クナラサルヲ如何セン

